

《コラム》

## 大気汚染とドライラマ

衣袋 智子

年末に恩師である吉田先生よりメールを頂いた。

先生からは、たまにモンゴルに住む私のところにメールが届くのであるが、用件はモンゴルの出版物の手配かもしくは先生の研究分野に関わる調査の手伝いの要請だ。前者はお安い御用だが、後者はなかなか大変だ。

思い出すと、先生からの調査依頼に「10×10日の将棋板と駒とルールの説明をさがしてほしい」というのがあった。将棋については将棋の専門家というモンゴルの年寄りを家に訪ねて行って根掘り葉掘り聞くという段取りを決めた。ケンピンスキーホテル近くの、社会主義時代に建てられたアパートの一室は、まさに社会主義時代から恐らく何も変わっていないのだらうという設えで、あめ色の合板なのか木なのか未だに良くわからない棚が壁一面を占めていた。肺か気管支が悪そうな年寄りで、挨拶する間にも何べんもガラガラと痰が絡んでいた。そして、資料を複写させていただき、そのような将棋のセットがあれば買いたいという要望をこちらが伝えると、ひたすら沈黙の時間が続いた。もうこちらは必死であるので10分そこの間に3回も同じお願いをして頭を下げ、最後にしぶしぶ「それならいいでしょう、しかし、今日すぐというわけにはいかないから後日また電話をしてください」と、体よく追い返されてしまった。その後は電話番号が変わってしまって、つながらなくなった。

年末に送られてきた先生のメールの内容だが、『日本とモンゴル』という公益社団法人日本モンゴル協会の機関誌があって、学術的な記事が増えてきたものだから、気軽に読めて、なおモンゴルを理解するのに役立つコラムまたはコラム風のものを書いてほしいというものであった。「イブクロ君は文章を書きなれていないかもしれないから、必要であれば手直しをする」とも、仰ってくださった。これは書かなければ、モンゴルに住んで18年という経歴も泣くというものだらう。そう思って書いたのがこれである。

さて、私のことを御存知の方は少ないだろうから、とりあえず、自己紹介だけはしておこう。早稲田大学在学中の1999年にモンゴルに留学して以来、卒業前後の一年ほどもを除いて大部分をモンゴルで暮らしている。テレビのコーディネーターの仕事、養蜂会社社長の仕事、出版社での編集の仕事と、非常に散らかった仕事をしている。テレビは生活のためで年に1本ほど、月に平均4.5日の仕事である。養蜂と編集は両方とも好きだから。つまり趣味のため。夏は養蜂、冬は編集と仕事を分けられる。養蜂のために春夏は地方の養蜂場で、

秋冬はウランバートルで、暮らしている。

今回は初回ということでもあるので、最近のモンゴルの雰囲気について書きたい。2016年11月にMonsudarという会社から夏目漱石の『坊ちゃん』を翻訳出版した。この本の選考と翻訳のチェック、編集などを私が行った。翻訳者は優秀な方で非常にいい翻訳になって、発売以来今に至るまで文学部門でベストセラーとなっている。ベストセラーといえば、日本では4,5万冊位だから、単純に人口比からしてモンゴルでは1000冊ほど売ればというところだが、実際には売れるのは週に25冊ほどである。それでもベストセラーなのであるが、大変厳しい。出版というのは、ほとんど慈善事業に近いというのがこの国の実情なのである。

それはさておき、読んだ方々から寄せられた感想は、「坊ちゃんは正直でまっすぐなので我々モンゴル人は見習うべきだ」というものが大部分である。文学を愛する私としては、これは大変につまらない感想である。「漱石はなぜ坊ちゃんに小説にあるべき『美』を描かなかったのか」などというあたりまで、もっと突き詰めてほしい。一方で、現代モンゴルでは『正直』『筋を通す』ということが、それほどに語られるべきなのですね、と納得もした。

モンゴルは今、実際、誠実や筋を通すことに非常に飢えている。上から下まで誰もが他人を信じることができないありさまなのである。

目下ウランバートル市民の関心事は「ウランバートルの大気汚染」問題だ。ウランバートルはもはや世界で一番大気汚染の深刻な首都という不名誉な都市になった。これが原因で亡くなった子供たちもいるということである。そして、この問題の裏にあるのも結局は筋の通らぬ騙しあいなのである。詳しい数字は良くわからないが、国は現時点までに何十億円というお金を大気汚染対策に費やしてきた。外国からの貸付も使われた。ゲル地区の住民は燃焼がよくなるストーブなどを半強制的に買わされた。それなのに、改善されるどころか、最悪の汚染の数値を更新し続けている。そして未だに大気汚染対策の予算は組み続けられ、逆に大気汚染は進む一方だ。国民は、役人や政治家たちが、この大気汚染対策の予算からキックバックをもらっているに違いないと考えている。そして、国民はデモをする以外にアクションを起こさない。

国民は「政治家がプロジェクトを起こして予算を立てては、その金を自らの懐に入れていたからだ」と、叫ぶ。与党は旧政権である野党のせいにする。野党は現政権のせいにする。政治家の中には「ウランバートルになど住むべきではない」などと市民を窮地に追い込む者もいる。SNSには「廃止された死刑を復活させて、金を懐に入れた犯人を殺すべきだ」と書き立てる者もいる。非常に不穏な状態である。

すべての問題について、これと同じような議論が繰り返されているのだ。だが結局、誰も責任をとらない。誰も筋を通さないのである。

ダライラマが昨年モンゴルを訪問した。これによって中国からの経済制裁が始まり、財政は大変なことになっている。もともと借り入ればかりの経済であるせいで大不況が始まっていたときであったから、この制裁でさらに追い討ちをかけられている。

そして、かつてはダライラマに「モンゴル人の信仰を見習うべき」とまで言わしめたこの国の人たちの間に、「ダライラマのせいで大変なことになった!」と語る者たちが出てきている。チベット仏教の伝統的なルールがあって、ダライラマは招聘されない限り、外国を訪問したりしない。つまり、今回だって、招聘されたからモンゴルを訪問したのである。招聘したのは誰かという、今回ダライラマが滞在したのが国の迎賓施設だったことからわかる通り、国の中枢にいる人たちだ。そこを飛ばして、まるでダライラマが中国とモンゴルを険悪にするために、もしくは、モンゴル人を洗脳するために策略を練っている、という話題が持ち上がったのだ。モンゴルは信仰の自由が認められた国である。そして、中国という大国の重圧を何百年もやり過ごしている国である。ダライラマが初めてモンゴルを訪れて40年近くが経ったが、その間ダライラマとのかかわりを中国に対してどのように表明するかということが、筋を通して行われていなかったことが、今回のことで一気に大きな問題として浮かび上がってきたのだ。結局、ダライラマを非難する人、ダライラマを擁護する人がそれぞれに罵り合い、何の結論にも至らず、うやむやになってしまっている。

1月の日本からのニュース(2017/01/14 ニューズウィーク日本版)には「モンゴルはインドに中国との仲裁を懇願している」と書かれていたので、そういう方法で解決するのだろうが、やはり筋が通っているようには考えられない。重圧には、重圧を以って対処するしかないという *arga*/方法/ありきで、*zarchim*/筋/、や *yos züi*/倫理/を表明しないのだ。

モンゴル人は非常に情を重んじる。重んじるというより、情に従って生きているような人々だ。交通事故の被害者よりも加害者が貧しかった場合、「貧しい人をいじめるな」と、被害者に損害賠償を控えさせるよう説得をする人も多いし、被害者が損害賠償を控えざるを得なくなる雰囲気になることも多い。貧しい子供たちに援助をする中流の人々もたくさんいる。情に流されれば、筋の通らないことも多くなり、法律も負けてしまうだろう。これは、モンゴルの大きな弱点でもあれば、美しいところでもあるのだ。

もっとも私だって、この国では万事なかなか筋を通すことができない。自省の意味も込めて、書かせていただいた。

(2017年1月)